

## 「父ヨセフの奮闘」

クリスマスのお祝いを終えて、しばらく経ちました。日本社会では、クリスマスを祝った後、お寺の鐘を聴いて、神社にお参りに行って、そして明日から、日常の生活へと帰っていくのだろうと思います。かく言う私たちキリスト者もクリスマスが終わると、その後の物語には、あまり触れない傾向があります。とくにマタイによる福音書におけるクリスマス物語のその後は少々刺激が強いと言いますか、辛味のある展開ですので、福音宣教という観点から、あまり語ることに積極的に成り難い・・・。マタイによる福音書において、占星術の学者たち、つまり東方の博士たちが物語から退いた後、いわゆる「嬰児大虐殺」と呼ばれる出来事が起こります。これは、救世主探索を博士たちに依頼したヘロデ王が、博士たちに逃げられたこと、結局、救世主がどこにいるのか分からなかったことに対して、大いに腹を立て、ベツレヘム周辺一帯にいた 2 歳以下の男子を皆殺しにしました、というものです。聖書以外の伝承記録である『ユダヤ古代誌』を書いたヨセフスも、当時のヘロデ王の異常な精神状態について報告していて、自分の地位が脅かされるという危機感と猜疑心に囚われた施政者が、いかに残酷な決定をするのか。その悲しい一例が、クリスマスの直後に起こったのだと言うことです。もちろん、こんなことは、子ども達が取り組むページェント、降誕劇では触れないし、燭火贊美礼拝でも語ることはありません。ただ、聖書に親しむ一キリスト者であるからには、知識として知っておく必要はあるでしょう。

今日は、喜びとクリスマスと、悲しい大虐殺の間に挟まれた、短い聖書箇所をご一緒に読んでみたいと思います。主人公は、母マリアさんではなく、父ヨセフさんです。マタイによる福音書が伝えるクリスマス物語では、主の御使いである天使は、父ヨセフさんの方に現れます。ルカによる福

音書では、母マリアさんに現れるのですが、福音書によって、そういう違いがあることも、知識として知っておくと良いかと思います。今日、読んでいるマタイによる福音書は、旧約聖書との接続を、とても意識して書かれています。マタイによる福音書の冒頭に置かれている「イエス・キリストの系図」という、カタカナ表記された人名の洪水は、日本人である私たちには苦痛でさえありますが、あれは、イエス様の血筋が、旧約聖書に登場する著名人たちと繋がっているんですよ、ということを分かり易く表現しているということです。旧約聖書をよく知っているユダヤ人に読んでもらうことを想定して、マタイによる福音書は書かれているので、そういう工夫がなされているんですね。初めてマタイによる福音書を読んだユダヤ人が、「お、私の知っている名前が書いてあるぞ、これは読んでみる価値があるかも知れない」と、そんなリアクションをすることを、マタイによる福音書は期待しているわけですね。

話が逸れました。要するに、旧約聖書との接続、ユダヤ教との接続を念頭に置いたマタイによる福音書ですから、イエス様の誕生物語において重要人物となるのは、おとめマリアさんよりも、ダビデ王の血統にあるヨセフさんなんですよね。だから、見方を変えるなら、マタイによる福音書に登場するヨセフさんと言うのは、とても重たい責任を負わされているわけです。旧約聖書の超有名人であるダビデ王の血を引き、それ故に、神様の御心に留まり、イエス様を身籠ったマリアさんの夫となることを運命づけられ、そして、今日の聖書箇所では、神様から、いきなり「ヘロデ王が子どもたちの命を狙っているから、エジプトに避難しなさい」って言われるという。未婚の母となりそうだったマリアさんを受け入れて、身重のマリアさんと旅して、馬小屋での出産に立ち会い、援助して。それらだけでもヨセフさんの決意と働きは称賛に値するだろうに。神様は、さらに言うに事を欠いて、「エジプトへ行け」という。確かに、エジプトのアレクサンドリアという都市を中心に、大きなユダヤ人共同体があったので、イスラエルからの亡命者を受け入れる下地は整っていたと思

われます。でも、ねえ、いきなり外国に逃げろと言われて、「アーメン」「異議無し」と言える信仰者は、そうはいないでしょう。イエス様の母親になることを決意したマリアさんも凄いですが、やっぱり、その父親を引き受けたヨセフさんも凄い人なんです。

コンラートという画家が、1401年に『キリストの生涯』という作品を描きました。この作品は、ベッドの上でイエス様を抱いてあやすマリアさんと、その横で、地べたに這いつくばって火を起こし、食事の準備をするヨセフさんを描いています。インターネット上でも見ることができます。興味があれば探してみてください。コンラート作『キリストの生涯』1401年、です。この絵は、男尊女卑、家父長制による男性優位が当たり前の当時にあって、いかにヨセフさんがマリアさんに尽くしているのか、良い夫であり、良い父であったのかを端的に伝えています。

ある聖書学者の言葉ですが、「ヨセフは、聖書で唯一、欠点の見当たらない男性である」と言われています。この聖書学者さんの個人的な見解の域を出ないものですが、それでも、うなずける点はあります。聖書にはとかくダメな男性の描写多い。最も古くは、イブの誘いに乗って禁断の木の実を食べてしまい、その上、かばう様子もなくイブに全責任を押し付ける言い訳を披露したアダム。すこぶる善人であったことで大洪水を生き延びたけれど、酔っぱらって息子たちに裸を晒し、後世に禍根を残したノア。正室サラと側室ラケルの衝突を全く調停できずに、ラケルを追い出す他なかったアブラハム。長子の祝福を奪い合って大喧嘩を繰り広げたヤコブとエサウ。と、その長子の祝福を騙されて手放してしまったイサク。エジプトからイスラエルの民を救い出すという偉業を任せられつつ、首尾悪く、最後、約束の地を踏めなかつたモーセ。大士師として大きな活躍を成し遂げながら、デリラという女性に唆されて、力の源である髪の毛を剃られ敵の手に落ちたサムソン。英雄的な王様としてイスラエルの黄金期を築いたけれど、水浴び中の妻に恋をして消えない罪を背負ったダビデ。そのダビデの子として豊かな知識を与えられ、さらにイスラエルを発展させつつも、

老年に差し掛かり異教の若い女性に夢中になって晩節を綺麗に保てなかつたソロモンなどなど。ちょっと例示が長くなってしましましたが、聖書は、悲しいかな、ダメであることをやめられない男性のカタログのようでもあります。そんな中で、ヨセフさんだけは、これという欠点が見当たらぬいというのです。神様の御言葉を受け入れ、一途にマリアさんを愛し、イエス様を愛し、自分的人生や生活をすべて投げ打って、エジプトへ向かい、家族が安全であることを最優先に行動しました。

ヨセフさんは、その後すぐに福音書の物語からは離脱してしまいますが、御子イエス・キリストの父親として、立派な働きを、生き方を魅せた人として認められると言って良いでしょう。

私も、どちらかと言うと、いや、確実に、ヨセフさんサイドの男性ではなく、聖書の「頑張ったけどダメな男」カタログに載る側だと思います。でも、それでも思うのは、私は神様の御言葉を一度受け入れたのだから、その信仰を一途に、ときに格好悪くとも、上手くいかなくとも、持ち続けたいとな、と。ヨセフさんもきっと滅茶苦茶気が利く万能夫、スーパー父親ではなかつたと思います。マリアさんの妊娠を知って、ヨセフさんは最初「縁を切ろう」と考えました。その確かに正しいのだけれど、マリアさんの今後を思えばひどく短絡的と言わざるを得ない決断は、ヨセフさんが優しいけど気弱で不器用であった可能性を示唆しています。

天使の来訪と預言、マリアさんとの結婚、ベツレヘムまでの旅、イエス様の誕生、多くの来訪客があり、エジプトへ逃げろと言われる。その一つ一つの出来事を前に、おっかなびっくりしつつ、でも、不器用ながら、神様の御言葉に応えようと、家族を守ろうと、必死に手立てを尽くするヨセフさんの姿を想像します。神様の子どもの父親になると決意し、どんな無茶な状況でも献身を尽くしたヨセフさんの姿には、確かに、私たちキリスト者の理想形があります。もちろん、ヨセフさんの働きの全てを真似することはできません。でも、神様のために、イエス様のために、不器用でも良いから、上手くいかなくとも良いから、応えていこうじゃないか、という信仰を受け継ぎたいで

すね。私たちの信仰の旅路も、時々、神様からの無茶な御心に出くわすことがあります。そのすべてを受け止め切る力は、私たちには無いかも知れません。でも、ヨセフさんの奮闘に倣いつつ、奮闘しないと見えない景色や未来があると期待して。2026年も主の肢として、神様の子どもとして、私たちも信じ、祈る日々を歩んで参りましょう。最後にお祈りを致します。

神様。今日、私たちは2026年最初の聖日礼拝を、このように敬愛する方々と共にお捧げしています。あなたは、御子イエス・キリストを、この世にお与えになることで、イエス様を中心とした様々な人間模様を描いてくださいました。イエス様がいなかつたら私たちは他人のままだったかも知れない。自分の賜物に気付かなかつたかも知れない。奉仕の喜びを学ぶことも、感謝される嬉しさも知らなかつたかも知れない。どうか、神様。あなたの御子の父親になることを信じ、受け入れたヨセフのように、私たちも、あなたの御言葉に従い、折が良くても悪くても、主の肢として良き働きを成すことができますように。お支え、お導きください。あなたに連なることで得られる、大きな幸いと恵みがあると確信して、今年も感謝の日々を過ごすことができますように。

このお祈りを我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。